

平成22年5月17日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520153
 研究課題名（和文） 日本における茶文化形成過程に関する研究—栄西・明恵の再評価と闘茶の検討—
 研究課題名（英文） A Research about the process of making a tea drinking culture in Japan —A reconsideration about the achievements of Eisai and Myoue, and a study of Tou-cha
 研究代表者
 米田 真理子（YONEDA MARIKO）
 大阪大学・文学研究科・特任研究員
 研究者番号：00423210

研究成果の概要（和文）：日本の茶の始発を鎌倉初期に求める伝承が、中世以来、存在する。栄西を茶祖とするこの伝承は、従来説では、平安期の茶の受容と矛盾することを理由に否定するが、本研究では、伝承が生じたという事実に着眼して、文献に基づきその生成過程を検証し、鎌倉初期に、茶の飲み方に大きな変化があったことを明らかにした。そして、そのことに由来して、茶の将来伝承が生じたと結論づけた。

研究成果の概要（英文）：In Japan, it has been widely believed that customs of tea-drinking began at the early Kamakura Period. According to the traditional understanding which existed since Medieval Period, Eisai was the first man who brought the tea seed from China and transmitted it to Japan. Recently, researchers have pointed out that such understanding is not necessarily truth, because tea-drinking was already spread among upper-class people in the Heian Period. In this study, I considered the reasons why that traditional understanding of Eisai had been brought out. From analyzing documents of Medieval Period, I have reached the conclusion that the style of tea-drinking was extremely changed at the early Kamakura Period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本文学・日中交流史・茶文化・栄西・明恵

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の茶の始発をめぐり、栄西が茶を将来したとする伝承が、中世に生じた。この話は、鎌倉時代後期に成立した『明恵上人伝記』

に掲載されており、長く「事実」として受けとめられてきたが、平安時代以来の茶の受容の実態と矛盾するため、その否定も早くから行われた。このような現象は、日本の文化の、

鎌倉初期から室町にかけての変化と、現代への継承について再検討することを迫る問題と根底で通ずると考える。

(2) 栄西の茶将來說に対しては、近年、特に日本史の研究分野を中心に、記録や文書の分析に基づき否定する見解が続出し、伝承そのものもやや過小評価される傾向にあった。たしかに栄西の茶将来は歴史的な「事実」としては否定されるべき事柄ではある。しかし、伝承が現代にまで信じられたことも、また一方で「事実」といえ、そして、この伝承に付随して生じた、新しい文化的事象も存在する。伝承を「否定」するだけでは、伝承が生じた必然や、当該期の茶文化の特色を看過する結果を招くともいえ、中世の茶文化の実態を解明するためには、研究史自体を見直す必要もあると考える。

(3) 中世の茶文化を考えるにあたり、従来説では、茶の湯成立以降が対象とされることが多かった。また、それ以前の茶文化については、「茶の湯前史」との位置付けも見られる。鎌倉時代の茶を、茶の湯からフィードバックさせるのではなく、その時代の文化に即して、考察する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 中世の文学、あるいは文化と茶とがどのように関係するかを検証することを第一の目的として、『明恵上人伝記』に掲載された茶将來說話を取り上げ、その読解のため、中世の茶の受容について解明することを目標とした。考察の過程において、さらに『喫茶養生記』の再検討が必要となり、栄西の主張の詳細を明確にすることと、本書の新たな位置付けを目標の一つに掲げた。

(2) 茶の将來說話の読解に基づき、中世に茶祖とされた栄西と明恵の再評価を目指した。特に栄西に関しては、後世に禅との結び付きが強調されるようになり、栄西その人の事蹟や業績への評価にも影響した。そこで、栄西の著書や動向に関する調査を開始し、茶祖とされた経緯を跡づけるため、その出発点となる栄西その人の思想を検証することを目指した。

(3) 上記の検討を通して、鎌倉時代の茶の受容の在り方を見直し、鎌倉時代後期以降に大流行した闘茶の環境・条件・背景を解明することを目的とした。また鎌倉後期になると、茶の味について言及する文書や書状が増えるが、このことも茶の将来伝承の解明に関わるものといえ、闘茶の発生とも時期が重なり、一つの転換期であったことを示している。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、茶の将来に関わって、いわゆる「伝承」を研究対象とするが、方法としてはその「伝承」を掲載する『明恵上人伝記』の読解をはじめ文献資料に基づき、その分析を主軸とした。分析方法は、それらに記された内容をそのまま「事実」として受け取るのではなく、文学作品の読解と同様に、その話がどのようにして成立したかを、言葉の意味や背景の考察などの様々な側面からアプローチした。

(2) 茶祖伝承の形成と展開には、栄西と明恵に対する評価の、時代による変化が大きく関与するため、両者の事蹟や動向の解明にも着手した。特に栄西は、鎌倉末期に臨済禅の祖師とされた評価が後世にまで影響して、栄西研究においても密教の教学面に関する考察は今なお少ない。『喫茶養生記』は、その密教の思想を基盤として著述されており、そして日本の茶文化の形成を考える上では重要な書物といえる。そこで、栄西の密教の思想的展開の跡づけを行った。具体的には、栄西が入宋したことによって、思想に転換が認められるとされてきた通説に対して、最晩年に記された『喫茶養生記』の密教的側面を検証するとともに、そこでの主張を再確認し、後世の評価に基づく本書の位置付けを改めた。

(3) 中世の茶を、文化史に位置付けるためには、禅との関わりは無視し得ない。鎌倉から室町にかけての、禅にかかわる文学作品を取り上げ、それらの文化的位置付けを試み、社会的な意義を考察した。また、後世の茶書に大きな影響を与えた『徒然草』の章段の分析を行った。中世の茶における思想的な展開には、仏教的な側面とあわせて、連歌師を介在して、それまでの和歌・散文などの文学や、文化において蓄積されてきた美意識が影響したことも考察する必要がある。

4. 研究成果

(1) 『明恵上人伝記』と『喫茶養生記』の読解を中心に、中世に生じた茶将来伝承は、鎌倉期に茶の飲み方が変化したことに基づき生じたことを明らかにした。具体的には、平安期は、茶に甘味料などの添加物を加えて飲んでいたが、栄西は、『喫茶養生記』において、何も加えず、茶そのものの味を味わうことを提唱した。この飲み方が定着した鎌倉後期頃に、かかる茶の飲み方の変化に起因して、茶の将来にかかわる伝承が生じたと結論した。さらに、このことが、茶の味を飲み分ける闘茶を可能にし、また、茶の味に言及する書状・文書などの前提となったと考え、中世

の茶の歴史に新知見を加えた。また、茶に添加物を加えない飲み方は、現代にまで伝えられており、私たちの生活にも密着している。そのことが、茶将来伝承が、否定を繰り返されつつも、長く信じられてきた理由であると指摘した。

(2)『明恵上人伝記』に載る茶将来に関する話を位置付け直し、明恵の茶の受容の実態も明らかにした。明恵こそが、最初に日本の茶祖とされた人物であり、それは明恵が、『喫茶養生記』において提唱された茶の飲み方を実践したことによるもので、中世に新たに造形された像であった。その後、栄西が茶祖とされたことは、この伝承では二段階目に位置付けられ、栄西の茶に対する功績と入宋の事実とが反映していることを指摘した。

また、栄西に対する評価について、従来の禅に主軸を置く見方を見直した。特に密教の教学とそれにかかわる動向については、栄西の著作の発掘・復現・読解を通じて考察を行った。私見では、栄西は終生変わらず密教に励んだものと考えられる。また、この考察により、栄西の密教に関わる思想面は明らかになりつつあるといえ、これからの研究課題へも繋がった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 米田真理子、中世の伝説・伝承—兼好と頼阿と弘融、伊賀市史、査読無、2010、印刷中
- ② 米田真理子、『改偏教主決』発見による栄西伝記の再検討(改訂版)、中世宗教テキスト体系の復原的研究—真福寺聖教典籍の再構築・研究成果報告書、査読無、2010、印刷中
- ③ 米田真理子、法守とその時代—『徒然草』仁和寺関連章段の背景—、皇統迭立と文学形成(和泉書院)、査読無、2009、pp. 261-279
- ④ 米田真理子、再討茶祖栄西像、書籍之路与文化交流(中国・上海辞書出版社)、査読無、2009、pp. 117-137
- ⑤ 米田真理子、栄西の入宋—栄西における密と禅—、海を渡る天台文化(勉誠出版)、査読無、2008、pp. 203-224

- ⑥ 米田真理子、『改偏教主決』発見による栄西伝記の再検討、日本における宗教テキストの諸位相と統辞法:「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第4回国際研究集会報告書、査読無、2008、pp. 336-345
- ⑦ 米田真理子、『千代野物語』の絵と詞と、奈良絵本・絵巻研究、査読無、6号、2008、pp. 1-12
- ⑧ 米田真理子、『憂喜餘の友』から『千代野物語』へ—中世における千代野開悟譚の展開—、説話文学研究、査読有、43号、2008、pp. 63-72
- ⑨ 米田真理子、筑紫路の栄西、島津忠夫著作集第14巻月報、査読無、2008、pp. 4
- ⑩ 米田真理子、茶祖栄西像の再検討—『喫茶養生記』をめぐる—、芸能史研究、査読有、177号、2007年、pp. 1-16
- ⑪ 米田真理子、金剛寺蔵『憂喜餘の友』解題並びに影印・翻刻・訓読文—「千代野物語」諸本との比較を通して—、金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究・研究成果報告書、査読無、第一分冊、2007、pp. 507-574

[学会発表] (計 5 件)

- ① 米田真理子、栄西の九州における活動—『改偏教主決』の読解を通して—、名古屋大学大学院文学研究科シンポジウム「中世宗教テキスト研究の可能性」、2009年12月25日、名古屋大学
- ② 米田真理子、『改偏教主決』発見による栄西伝記の再検討、名古屋大学グローバルCOE国際研究集会「日本宗教テキストの諸位相と統辞法」、2008年7月16日、於名古屋市大須真福寺
- ③ 米田真理子、『溪嵐拾葉集』にみる栄西、早稲田大学日本宗教文化研究所・浙江工商大学日本文化研究所主催第三回共同シンポジウム「海を渡る天台文化」、2008年6月15日、於中国天台山
- ④ 米田真理子、「ちよの物語」の文と絵と、奈良絵本・絵巻国際会議ダブリン大会、2008年3月23日、アイルランド・チェスタービーティーライブラリー

- ⑤ 米田真理子、栄西「入唐縁起」をめぐって、遣隋唐使 1400 周年記念国際シンポジウム「東アジア文化交流の源流」、2007 年 9 月 6 日、於中国杭州市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

米田 真理子 (YONEDA MARIKO)
大阪大学・文学研究科・特任研究員
研究者番号：00423210